



タイトル Title	読書空間 『和解のために』 朴 裕河 / 『領土ナショナリズムの誕生』 玄 大松
著者 Author(s)	木村, 幹
掲載誌・巻号・ページ Citation	論座,144:306-307
刊行日 Issue date	2007-05
資源タイプ Resource Type	Article / 一般雑誌記事
版区分 Resource Version	author
権利 Rights	
DOI	
JaLDOI	
URL	<a href="http://www.lib.kobe-u.ac.jp/handle_kernel/90001590">http://www.lib.kobe-u.ac.jp/handle_kernel/90001590</a>

『和解のために』 朴 裕河／『領土ナショナリズムの誕生』 玄 大松

幼い子供達の遊びを見ていると、何が「ずるい」ことなのかよくわかる。隣の子のおもちゃを力づくで取る子はまだ可愛い。本当に「ずるい」のは、よくわからない理屈をこねて他の子を煙に巻き、ちゃっかり欲しいおもちゃを手にしてしまう子達である。一見賢い「よい子」に見えるから、彼等は余計にたちが悪い。

同じことは大人にも言える。例えば、社会問題について議論する場合、「ずるい」やり方は決まっている。それはあり難そうな概念を動員し、何時の間にか自分だけを、論争の安全地帯に置いてしまう方法だ。こうしてその道の「達人」たちは、小難しい「呪文」を唱えて人々を混乱させ、有名大学の有名教授である21世紀の自分達が、恰も前世紀の被害者達と同列であるかのように錯覚させる。

だからこそ、日韓の歴史問題を考える時にも、論者の立ち位置を確認することは重要だ。

本書評で取り扱う二冊の著作は、共に韓国で生まれ、日本の大学院にて博士号を取得した経歴を持つ著者による労作である。朴裕河『和解のために』は、豊富な才に恵まれた著者によるスマートな秀作だ。誰もが避けがちな問題に、やわらかに語りかける著者の「発言者」としてのあり方には心から拍手を送りたい。歴史内容に関する内容も概ねバランスがいい。歴史問題を巡って対立する日韓両国の背後には、近代社会の産物にしか過ぎない「国家」や「民族」を過剰に意識した同工異曲のナショナリズムが存在する。その意味で、韓国人も自らが批判する日本人と同様の問題を抱えている。そのような著者の指摘は、正鵠を射たものということができる。

しかし、そのような現実に対する筆者の処方箋には不満が残る。何故なら著者の主張する被害者の側からの「赦し」というやり方が、日本側の民族主義者を動かすとは到底思えないからである。評者がそう考える理由は簡単だ。著者は結局、民族主義に突き動かされる人々と目線を等しくしようとはしないからである。微妙な立ち位置のぶれを承知で単純化するなら、著者は基本的に問題を、国家と国家から利益を得ている人々と、それ以外の人々に分類し、自らを後者の側の「立ち位置」に置いてしまっている。そこには、民族主義に拘る人々がどのような焦燥に駆られ、如何に真剣に悩んでいるかを考える契機が失われてしまっている。相手の気持ちを十分に考慮しない一方的な「赦し」が人々を動かす筈がない。

朴裕河氏の著作とは対照的に、玄大松『領土ナショナリズムの誕生』は、典型的な「研究者」の書であるといえる。とはいえ、「竹島／独島」を巡る議論を正面から取り上げることは、つい最近まで一大学院生であった著者にとっては、母国における将来を損ないかねないものであり、それを敢えて取り上げた勇気は、朴裕河氏のそれにも劣らない。

本書は基本的に論文集として構成されており、その為全体としてバランスやまとまりを欠く所なしとはしない。しかしながら、本書の白眉である戦後の竹島／独島を巡る日韓関

係史や韓国のメディア言説、更には韓国に学生達の対日認識についての実証的記述は、資料的価値の極めて高いものであり、その意味で本書は、暫くの間、この問題に関する基本文献として読まれることになるであろう。

しかし、そのような本書についても、やはり評者は不満を感じざるを得ない。日韓両国の間で感情的に拗れに拗れてしまったこの問題を、もう一度、「理性的」に捉えようとする著者の姿勢は研究者として、正当なものであり、同じ研究者である評者にも共感できるところは多い。しかしながら、その「理性的」であることと、話すべき内容を抑制することは同じではない。問題は結局、著者が最初に設定した「なぜ韓国人は、『独島／竹島問題』に熱くなるのか」という問題に、迫り得たのか、ということである。外交的資料は提示され、統計的分析も終了した。しかし、資料は飽くまで資料であり、ここから真の分析が開始されるべきではなかったのか。著者はその余りに自制の聞いた「立ち位置」故に、その肝心の答えを得る直前で矛を収め、結果、本書はそれが有していたかもしれない資料的価値以上のものを、決定的に失ったように見える。

こうして見ると、共に優れた二つの著作は、同時に大きな問題点を抱えていることがわかる。つまり、両著は共に問題の本質に迫りながらも、肝心のところで、問題の当事者としての立場を放棄し、安易な方法に流れてしまっている。つまり、民族主義の最大の問題は、それが国家主義や既得権等と結びついていることにあるのではない。より大きな問題は、それが時に我々にとって — 例えば「市民」、「労働者」や「ジェンダー」などといった対抗概念よりも遥かに — 魅力的に映ることがある、ということにある。だからこそ、民族主義は力を持ち、我々を常に悩ませているのである。

だからこそ、民族主義を理解する為には、民族主義に依存する人々が何に惹かれ、何を求めているかを理解することが必要だ。どんなに高尚な「赦し」を以てしても、また、どんなに説得力ある資料を提示しても、彼等が抱える心の中の問題を解決しなければ、結局彼等は民族主義にしがみ続けることになる。

学問という名の小難しい呪文で守られたシェルターから飛び出して、彼等ともう少し真剣に話してみよう。評者は、二人の著者はそれが可能な人々であると信じている。続く著作にも期待したい、と思う。